

奄美地区埋蔵文化財 分布調査報告書Ⅱ

1990年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

奄美大島地区の埋蔵文化財分布調査については、昭和51年度において全県的な調査の一環として実施されていますが、現在、この地区においては、奄美群島振興開発計画に基づき諸開発事業が急速に進められており、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るうえで、より詳細な埋蔵文化財の把握が必要となってきました。

このため、県教育委員会では、昭和62年度には徳之島地区を対象に、引き続いて昭和63年度には、大島本島南部地区を対象に分布調査を実施しました。

本書は、昭和63年度の分布調査結果をとりまとめたものであり、この地域の文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査に御協力いただいた関係町村教育委員会並びに関係者に心から感謝いたします。

平成2月3日

鹿児島県教育委員会
教育長 濱 里 忠 宣

本文目次

序文	
例言	
第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第II章 南部大島の環境	3
第III章 各町村の遺跡	4
第1節 大和村の遺跡	4
第2節 宇検村の遺跡	7
第3節 住用村の遺跡	8
第4節 瀬戸内町の遺跡	11
第5節 まとめ	22

挿図目次

第1図 毛陣貝塚近景	4
第2図 毛陣貝塚採集遺物(写真)	4
第3図 国直遺跡遠景	5
第4図 国直遺跡採集遺物(写真)	5
第5図 同 上	5
第6図 湯湾釜遺跡採集遺物	5
第7図 同 上(写真)	5
第8図 名音小中学校収蔵遺物	6
第9図 ヒエン浜遺跡近景	6
第10図 ヒエン浜遺跡採集遺物(写真)	6
第11図 同 上	6
第12図 屋鈍遺跡採集遺物(写真)	7
第13図 同 上	7
第14図 部連遺跡採集遺物(写真)	7
第15図 サモト遺跡遠景	8
第16図 小和瀬遺跡近景	8
第17図 サモト遺跡出土遺物	9
第18図 伝石原・川内出土遺物 - 類須恵器小壺 -	10

第19図	嘉徳集落遺跡遠景	11
第20図	嘉徳集落遺跡近景	11
第21図	嘉徳集落遺跡採集遺物	12
第22図	同上(写真1)	13
第23図	同上(写真2)	13
第24図	節子遺跡遠景	13
第25図	伝節子遺跡出土遺物1 - 類須恵器小壺 -	14
第26図	伝節子遺跡出土遺物2 - 類須恵器小壺 -	14
第27図	勝浦遺跡採集遺物	14
第28図	管鈍遺跡採集遺物	14
第29図	同上(写真)	15
第30図	須子茂遺跡採集遺物(写真)	15
第31図	西阿室遺跡採集遺物(写真)	15
第32図	須子茂遺跡採集遺物	15
第33図	安脚場遺跡近景	16
第34図	同上	16
第35図	安脚場遺跡露頭状況	16
第36図	同上	16
第37図	安脚場遺跡採集遺物-1-	17
第38図	安脚場遺跡採集遺物-2-	18
第39図	安脚場遺跡採集遺物(写真)	19
第40図	伝阿木名出土遺物 - 類須恵器小壺 -	20
第41図	伝加計呂麻島出土遺物 - 類須恵器小壺 -	20
第42図	遺跡立地条件模式図	23
付 図	南部大島遺跡分布図	

表 目 次

第1表	大和村遺跡地名表	6
第2表	宇検村遺跡地名表	7
第3表	住用村遺跡地名表	8
第4表	瀬戸内区遺跡地名表	21

例 言

- 1, 本報告書は、昭和63年度に実施した奄美地区埋蔵文化財分布調査の報告書である。
- 2, 本年度は奄美大島南部4町村を調査対象地区とし、田畑一筆ごとの悉皆調査を基本として行った。
- 3, 本書の遺跡地名表は、昭和59年度に作成した「鹿児島県市町村別遺跡地名表」に準拠し、遺跡番号もこれと一連のものとした。
- 4, 本書で用いた遺物番号は全て一連番号とし、挿図中の実測図と写真とは一致する。
- 5, 遺物の実測、製図、写真撮影は富田・長野が分担して行った。また、住用村内の遺物の一部については、住用村教育委員会の了解を得て住用村文化財調査報告No.1, 同No.2「サモト遺跡(1), (2)」より転載した。
- 6, 本書の執筆は、遺物の観察については長野が、その他については富田が行った。

第 I 章 調査の経過

第一節 調査の至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は奄美地区 1 市13町村の埋蔵文化財分布調査を昭和62年度から平成 2 年度の 4 カ年にわたって実施することを計画した。

これは、近年とみに進捗する奄美群島振興開発特別措置法に基づく諸開発計画の施行にさいし、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整のための資料を得ることを目的としたものである。

調査にあたっては、文化庁全国遺跡分布調査要項（昭和46年 4 月）に準拠し、埋蔵文化財を中心に悉皆調査を行い、必要に応じて試掘調査を実施することとした。

昭和62年度は徳之島 3 町を対象にして行い、本年度（昭和63年度）は奄美大島南部 4 町村—大和村、宇検村、住用村、瀬戸内町—について、平成元年 2 月27日から同年 3 月18日までの 3 週間にわたって実施した。

第 2 節 調査の組織

調査主体	鹿児島県教育委員会	教 育 長	濱 里 忠 宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉 井 浩 一
調査企画担当者	〃	課 長 補 佐	奥 園 義 則
	〃	主 幹	立 園 多 賀 生
	〃	主任文化財研究員 兼埋蔵文化財係長	吉 元 正 幸
調査担当者	〃	主 査	長 野 真 一
	〃	文化財研究員	富 田 逸 郎
調査事務担当者	〃	企画助成係係長	京 田 秀 允
	〃	主 査	平 山 章
	〃	主 事	末 永 郁 代

なお、調査にあたっては、大和村、宇検村、住用村、瀬戸内町の各教育委員会及び鹿児島県大島教育事務局の協力を得た。また、各町村の文化財保護審議会には何回となく情報の提供を頂き、笠利町歴史民俗資料館からは、発掘用具の借用及び重要遺物—完型の類須恵器小壺—の情報提供を頂いた。

第3節 調査の経過

調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

- 2月27日(月) 笠利町歴史民俗資料館にて、用具借用についての打合せ及び重要遺物の所蔵者等についての情報提供を受ける。大島教育事務局に協力依頼。
住用村教育委員会にて、調査の説明と協力依頼及び翌日以降の調査の打合せ。
- 2月28日(火) 住用村、山間・戸玉・市・青久・新村地区の調査。
- 3月 1日(水) 住用村石原にて完形の類須恵器小壺の写真撮影。石原・川内・見里・攢勝・城・和瀬地区の調査。大和村教育委員会にて翌日以降の打合せ。
- 3月 2日(木) 大和村、国直・湯湾釜・津名久・思勝・大棚・大金久・戸円・名音・志戸勘・今里地区の調査。
- 3月 3日(金) 大和村、福元地区の調査。瀬戸内町教育委員会と調査について打合せ。
- 3月 4日(土) 瀬戸内町、加計呂麻島に渡り、試掘予定地の安脚場を踏査。
- 3月 5日(日) 笠利町歴史民俗資料館へ発掘用具の借用に出向く。瀬戸内町海津崎の調査について交渉。
- 3月 6日(月) 瀬戸内町加計呂麻島の安脚場遺跡の調査。先日来、試掘地点を捜していたが、遺物の集中する箇所を捉えられず断念。かわりに、縄文土器の露出する崖を見つけ、ここを調査することにする。崖面清掃開始。
- 3月 7日(火) 前日の調査地点が上潮のため調査不能。加計呂麻島東半の分布調査に切替える。徳浜・諸鈍・渡連・生間・小勝・諸数・大下田・浜操・スリ浜・勝能地区の調査。
- 3月 8日(水) 安脚場遺跡の調査。
- 3月 9日(木) 加計呂麻島西半の分布調査、於斎・伊子茂・花富・西阿室・瀬相・俵・三浦・武名・木慈・喜入・須子茂・阿多地・瀬武・薩川・芝・実久地区の調査。
- 3月10日(金) 瀬戸内町本島の阿木名・勝浦・網野子・節子・嘉徳の調査。
- 3月13日(月) 瀬戸内町、伊須・嘉鉄・蘇刈・静水・やどり浜の調査。宇検村教委と打合せ。
- 3月14日(火) 宇検村、宇検・芦検・田検・久志・小勝・部連地区の調査。枝手久島上陸を試みるも断念。
- 3月15日(水) 宇検村、湯湾・石原・須古・部連・名柄・佐念・平田・屋鈍地区の調査。瀬戸内町、久慈・伊目・浦・古志・越地・攢勝地区の調査。
- 3月16日(木) 瀬戸内町、管鈍・花天・篠川・阿室釜・深浦・小名瀬・阿鉄・油井・久根津・手安・須手・古仁屋地区の調査。
- 3月17日(金) 瀬戸内町、節子にて完形の類須恵器小壺の写真撮影。嘉徳の再調査。調査終了。

第Ⅱ章 南部大島の環境

1. 位置と気候

奄美大島は、北緯28°31' から同28°1' に渡る細長い島で、奄美群島の主島である。奄美群島は、大隅半島沖から台湾にまで連なる南西諸島のほぼ中央部にあり、西方の沖合いを黒潮が流れている。

このような緯度的関係・黒潮の影響のため、気候は海洋性亜熱帯気候の特徴を示し、年平均気温21.3℃、年降水量3051mmである。また、夏季には南東の、冬季には北北東の季節風が卓越し、夏季から秋季にかけては台風の襲来も多い。

2. 地形と地質

奄美大島は古生層の岩盤を基盤に持ち、一般に峻険な山地に覆われ、笠利半島にわりと緩やかな起伏を持つ丘陵地が広がっているだけである。

基盤岩類は、和野頁岩層・大勝頁岩層・名瀬頁岩層・名瀬粘板岩凝灰岩層・新村粘板岩層・大棚砂岩層・名音珪岩層等からなり、一部に古期花崗岩類の貫入が見られる。これらはほぼ南北の走向を持って東西に並んでおり、これとほぼ直角になる東西方向の断層が見られる。山地はこの走向線・断層線に沿う谷によって開析されている。

表層土はこれら基盤岩類を母材とする風化土からなる赤黄色土壌や褐色森林土壌であり、前者は通称アカミチャと呼ばれる粘性に富む土壌で、後者はスダジイなどの照葉樹林で形成された土である。また、海岸にはサンゴ礁に由来する砂丘が、湾奥には小河川の形成する狭小な三角州堆積物低地のグライ土壌もわずかではあるが存在する。

海岸は全島にわたって典型的な沈降海岸の様相を呈し、大小さまざまな湾・入江が連続している。特に南部では顕著で、大島海峡・請島水道・与路島水道は沈降によるものと思われ、大島本島と加計呂麻島・請島・与路島等とを分離している。一般にこれらの島も含めて奄美大島と呼ぶ。

この複雑な屈曲を見せる海岸線をかたちづくる湾の奥には沿岸流や季節風の影響で砂丘が形成され、時としてその砂丘によって塞ぎ止められた潟湖が作られることもある。住用村の内海がその例である。また、住用村の山間から石原にかけての、住用川と役勝川の合流する河口三角洲にはマングローブが広がっている。しかし、山腹がそのまま海に落ち込み急崖をなしたり岩礁性の海岸も少なくない。

3. 植 生

大島の極層林は天然記念物に指定されている湯湾岳（標高694m）に見ることが出来る、スダシイ・イタジイなどの照葉樹林である。海浜には、アコウ・ガジュマルなどの巨木のほかアダンやヒルガオ等の群落が見られる。

4. 歴史的環境 先・原史時代の様相については詳らかでない。わずかにサモト遺跡・嘉徳遺跡の調査が行われただけであり、これらについては各々のページで触れる。

第三章 各町村の遺跡

第1節 大和村の遺跡

今回の調査前には、大和村では国直城跡・毛陣貝塚の2個所の遺跡しか知られていなかったが、新たに3個所の遺跡が発見された。これらはいずれも海岸部の遺跡である。

なお、内陸部の福元盆地は緩やかな起伏を持つ丘陵地であり、貝殻の集積があるというような情報もたらされたので、調査したが遺跡の発見にはいたらなかった。

I 毛陣貝塚 (84-3)

ツブラ崎とウツ崎を結んだ線を開口部とする湾入の奥に、大塚集落があるが、この東方には小河川によって開析された谷と狭小な沖積地が広がり、砂丘がこの出口を塞ぐような形で発達しており、ここに遺跡は立地している。沖合いにはリーフが発達しており波はさほどひどくない。

採集した遺物は第2図の写真に示すような、近世陶磁器だけであり、中世の城時代及びそれ以前の時代に相当するような遺物は確認出来なかった。なお、現況は第1図に示すような状態であるが、貝殻も多数散布している。

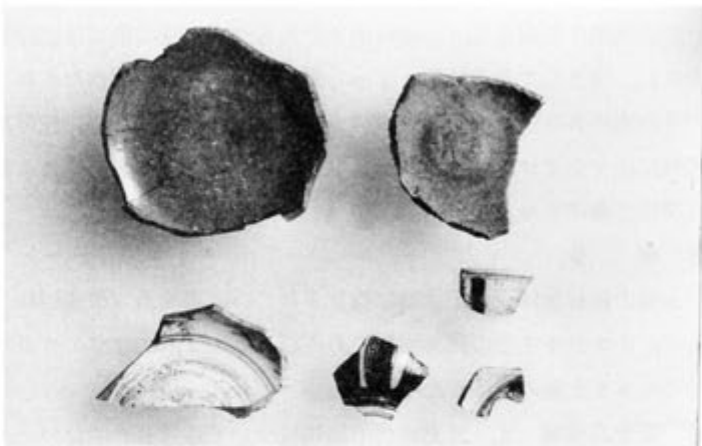
II 国直遺跡 (84-4)

思勝湾の東海岸の中程に国直の集落があるが、この地形も小河川の形成する狭小な沖積地とそれを塞ぐような海岸砂丘である。遺跡はこの砂丘の河岸よりに立地している。

採集した遺物は、第4・5図の1～4に示す。1は刻みを持つ三角突帯と沈線文で施文を構成している。2・3は陶質土器で、2は波状沈線と界線を持つ赤色土器、3は内面に格子目叩きを持つ灰色土器である。4は灰緑色の青磁で、小形



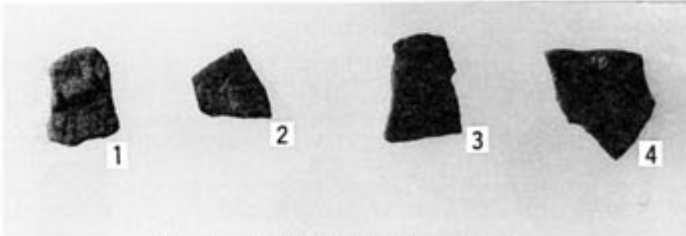
第1図 毛陣貝塚近景



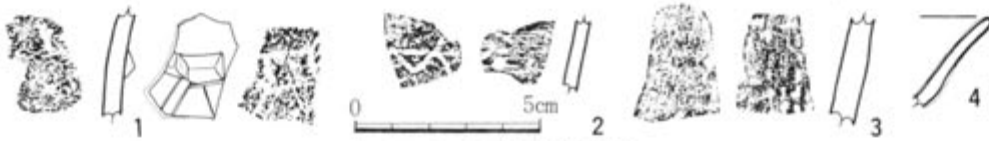
第2図 毛陣貝塚採集遺物 (写真)



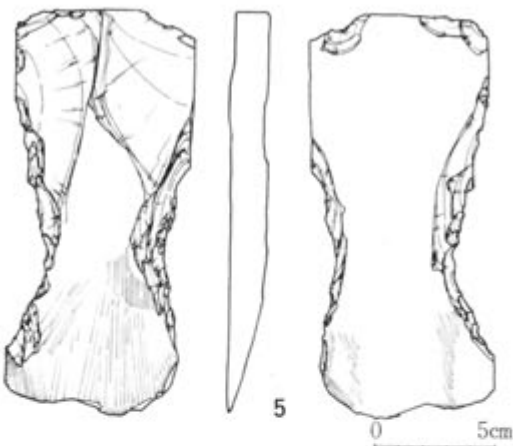
第3図 国直遺跡遠景



第4図 国直遺跡採集遺物(写真)



第5図 国直遺跡採集遺物



第6図 湯湾釜遺跡採集遺物



第7図 湯湾釜遺跡採集遺物(写真)

の皿である。

Ⅲ 湯湾釜遺跡 (84-5)

立地は国直遺跡と似ているが、大きな相違点は砂丘上ではなく山麓と砂丘の遷移点に立地していることである。遺物は、第6・7図に示した粘版岩製の磨製石斧が一点である。

Ⅳ ヒエン浜遺跡 (84-6)

比較的浅く広い湾入の奥、おそらく陸繋砂嘴であろう砂丘の後背低地側斜面に立地する遺跡である。

採集した遺物は、3点とも兼久式土器と思われる、6は刻目突帯と沈線文、7は突帯文の土器である。8は木葉を圧痕した底部である。

V その他の遺物

第8図は、名音小中学校に保管されている磨製石斧である。21cm×10cmを計る。

他にも似たような石斧が、大榑・戸円の各集落で採集されたらしいが実物を確認出来なかった。



第8図 名音小中学校収蔵遺物



第9図 ヒエン浜遺跡近景



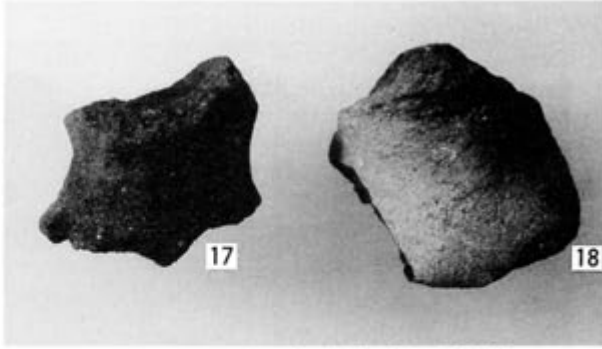
第10図 ヒエン浜遺跡採集遺物 (写真)



第11図 ヒエン浜遺跡採集遺物

第1表 大和村遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
84-1	国直城跡	国直城	山頂	中世		グスク(城)	
2	神屋湯湾岳					(国)昭43. 11. 8(天)	84-1
3	毛陣	大榑	砂丘	近世	青磁、染付		
4	国直	国直	砂丘	城時代	青磁、兼久式、類須恵器		
5	湯湾釜	湯湾釜	砂丘	*	石斧		
6	ヒエン浜	ヒエン浜	砂丘	*	兼久式、チャート剥片		



第12図 屋鈍遺跡採集遺物 (写真)

第2節 宇検村の遺跡

宇検村では今までに遺跡の所在は知られていなかったが、今回の調査で2個所の遺跡が発見された。いずれも海岸部の砂丘上に立地する遺跡で、現在の集落内に所在する。

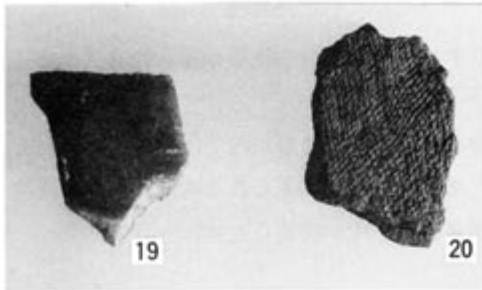
I 屋鈍遺跡 (55-2)



第13図 屋鈍遺跡採集遺物

立地は国直遺跡と全く同じで、遺跡の範囲は現在の集落とほぼ重なる。

採集した遺物は16の類須恵器の他はすべて兼久式土器と思われる。9は小形の甕形土器で、屈曲部にヘラ状工具で刺突を巡らしている。10・11には細い沈線文が描かれ、13では刻みを持つ三角突帯文が見られる。17・18は上底の脚部で、近年その分布が広がりがつつある。



第14図 部連遺跡採集遺物 (写真)

II 部連遺跡 (55-3)

立地は国直遺跡と全く同じで、19の青磁と20の内面布目圧痕の土器を採集している。

第2表 宇検村遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
85-1	神屋湯湾岳					(国)昭43. 11. 8	
2	屋鈍	屋鈍	砂丘	城時代	兼久式、類須恵器		
3	部連	部連	砂丘	城時代	青磁		

第3節 住用村の遺跡

住用村では今までに、サモト遺跡・小和瀬遺跡・住用城跡の3ヶ所の遺跡が知られている。中でも、サモト遺跡は昭和58・59年に熊本大学によって発掘調査が行なわれ、「南島考古学が集落の研究に一步を踏み出した小さな画期をなす」と言われている。(文献5, 6)

3層からは石組を持たない住居址が、主に面縄西洞式と宇宿上層式を伴って検出された。また、2層では炉の周囲に方形の石組を有する住居址が、宇宿上層式・喜念式及びカヤウチバンタ系の土器を伴って検出された。以上の事実から、宇宿上層式を手掛かりにして、土器の2形式以上にわたって定住が続いたこと、さらにその住居構造の変遷まで論ぜられている。同時に、

南九州縄文時代晩期の黒色磨研土器と沖縄のカヤウチバンタ系土器の伴出から、他地域と海路を主にした交流があったことが指摘されている。

さて、今回の調査では新しい遺跡の確認は出来なかった。石原及び川内では第18図に示すような類須恵器小壺の出土があったと伝えられるが、発見されたと伝えられる場所において遺物等は発見出来なかった。なお、小和瀬遺跡では類須恵器の小片を採集した。



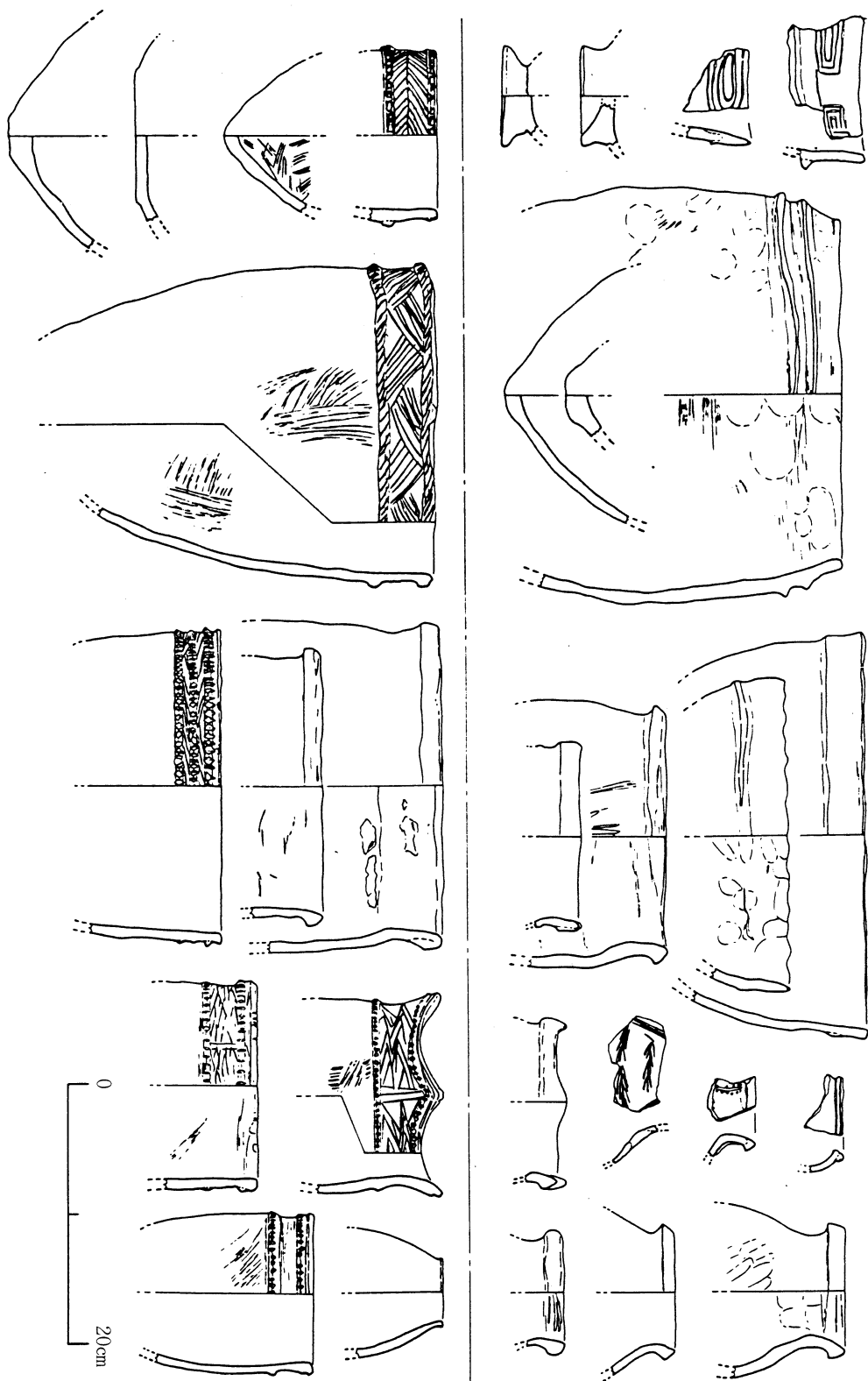
第15図 サモト遺跡遠景



第16図 小和瀬遺跡近景

第3表 住用村遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考	旧番号
86-1	サモト	城 池平1135	砂丘	縄文	土器(宇宿上層式、面縄西洞式、喜念工式、カヤウチバンタ式) 石器 その他 石、石皿、と石	昭和58年7月発掘 (サモト遺跡Ⅰ) (サモト遺跡Ⅱ)	
2	小和瀬	和瀬	砂丘	縄文時代	兼久式土器、類須恵器		
3	住用城跡	城 池平	山麓	縄文時代		別称(坂元 池平)	
4	神屋湯湾岳	住用村				(国)昭43. 11. 8(天)	86-1



第17図 サモト遺跡出土遺物 (文献6より転載)



第18図 伝石原(下)・川内(上)出土遺物 一類須恵器小壺一

第4節 瀬戸内町の遺跡

瀬戸内町内の遺跡は、鹿児島県遺跡地名表によると嘉徳遺跡・西古見城跡・諸鈍城跡の3箇所であるが他にも安脚場遺跡・皆津崎遺跡・嘉徳集落遺跡が知られていた。

今回の調査では新たに8箇所の遺跡を確認したが、いずれも外洋に開口部を持つ湾の海岸砂丘上に立地する遺跡である。

なお、皆津崎遺跡周辺一帯は広い範囲にわたって私有地になっており、遺跡に通じる道路も私道であり、閉鎖されていたため現地を確認することは出来なかったが、文献7の写真等で判断する限り、貝塚を含む遺跡であることは間違いない。

嘉徳遺跡は、昭和49年に発掘調査が行われ焼土遺構・石組遺構・ピット等の遺構が検出されるとともに、多数の土器が発掘され嘉徳式・嘉徳1式・嘉徳2式土器の三者が形式設定された。他にも南島の縄文土器が複数の層にわたって多数出土し、これらの編年がなされている。また、二重口縁を持つ極めて特異な形態の土器の出土でも知られている。

I 嘉徳集落遺跡 (87-4)

嘉徳湾奥には、嘉徳川が流れ込んでいるが、この川は沖積地をほとんど形成しておらず、河口は砂丘によって塞がれかかりこれを避けるような形で蛇行している。この砂丘の山麓寄りに立地していたのが嘉徳遺跡であるが、現在はそのほとんどが滅失している。

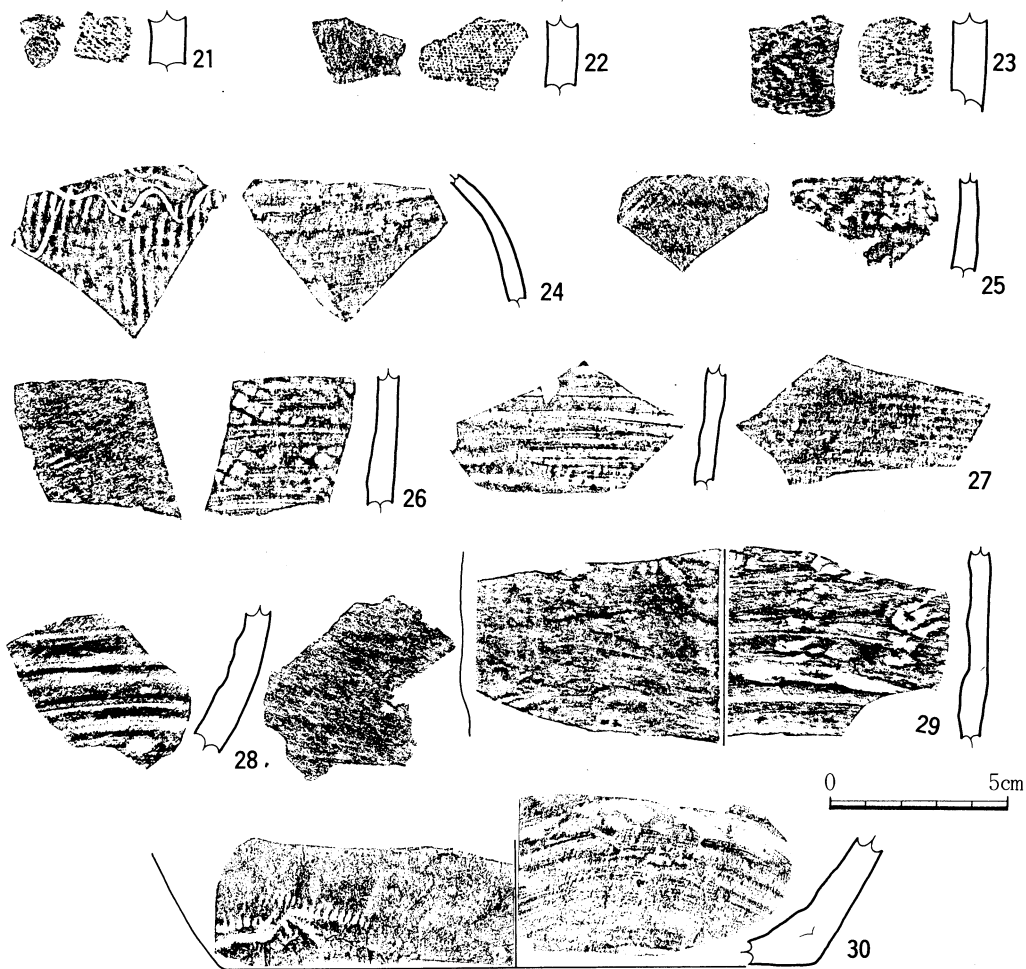
一方、集落の中を流れる川は嘉徳川の河口近くで合流するが、この川と海岸との間に砂丘があり集落はこの砂丘上に立地している。嘉徳集落遺跡はこの集落とほぼ範囲をおなじくして立地している。なお、この二者の砂丘は集落内の小河川によって分断されている。



第19図 嘉徳集落遺跡遠景



第20図 嘉徳集落遺跡近景



第21図 嘉徳集落遺跡採集遺物

嘉徳集落遺跡で採集された遺物は、第21～23図に示した。

21～23は内面に布目を圧痕した土器で、堅緻な焼成である。

24～30はすべて類須恵器で、30の底部を除いていずれも小形の器形である。24は類須恵器特有の小形壺で、肩部に平行して走る波状沈線文が見られる。これらの破片に残される叩き痕は、格子目であるが、29には末端部が孤状の工具による叩きが見られる。

他には兼久式と思われる土器の小片があるが、嘉徳遺跡で出土しているような縄文土器は見られない。

さて、以上述べてきたように嘉徳遺跡と嘉徳集落遺跡は、その立地及び遺物に違いが見られるので、全く別個の遺跡として捉えて記述して来た。文献5、6においても別個の遺跡として記載しており、「嘉徳集落遺跡」の語は同書の表記を踏襲した。

II 節子遺跡 (87-5)

伊須湾は南部大島東岸の最大の湾で、東南方に開口しているため夏の波浪は高いが、内部にはさらに小さな入り江がいくつもあり、リーフの発達もあって海岸では波もさほど強くない。

このような入り江には、この夏季の季節風と沿岸流の働きで砂丘が発達している。

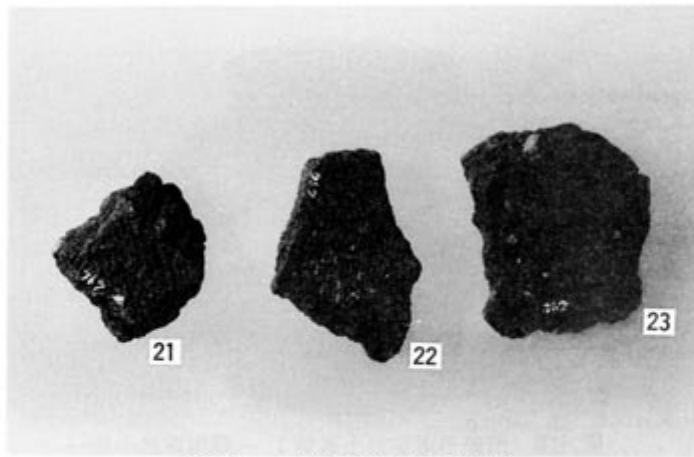
このような砂丘は三方を険峻な山に囲まれ、そこからの小川とそれの形成する狭小な沖積地とを背後に持つ。

そして、この沖積地と小川を塞ぐような形で砂丘が横たわっており、この砂丘の陸側の緩斜面に立地する遺跡がほとんどである。

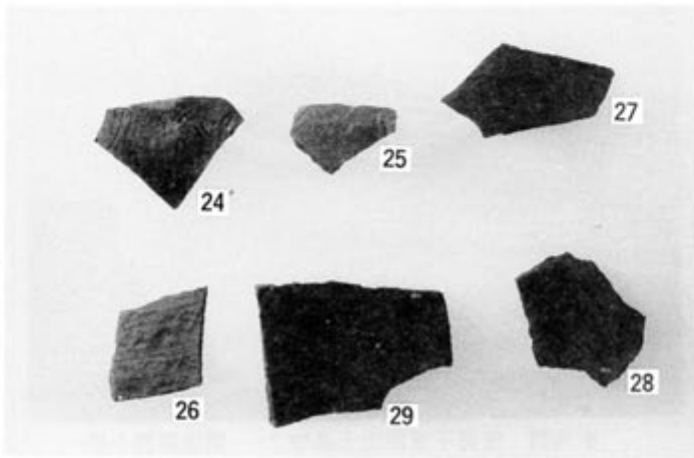
節子遺跡もこのような立地条件であり、伊須湾北岸の一番外洋に近い入り江の海岸砂丘にある。

今回の調査で青磁と類須恵器の小片を採集したが、図化するにいたらなかった。

第25・26図の類須恵器小壺は砂丘の外縁、沖積地と接するあたりで、溝の改修工事中に掘り出された物らしく、現在その工事に携わった方の所蔵されているの



第22図 嘉徳集落遺跡採集遺物



第23図 嘉徳集落遺跡採集遺物



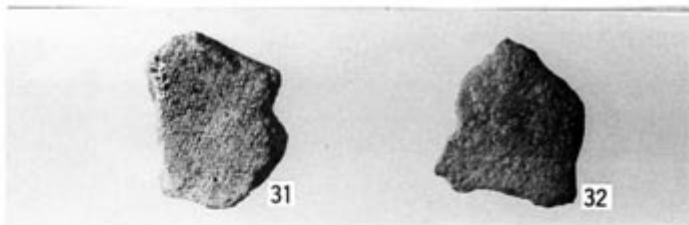
第24図 節子遺跡遠景



第25図 伝節子遺跡出土遺物1 一類須恵器小壺一



第26図 伝節子遺跡出土遺物2 一類須恵器小壺一



第27図 勝浦遺跡採集遺物



第28図 管鈍遺跡採集遺物

を撮影させていただいた。

第25図の小壺は5本の波状沈線文と2本の横線文を持ち、口縁内側に一条の段がつく。頸部に穿たれた小孔は焼成前に付けられた物である。

第26図の小壺は5本の波状沈線文を持ち、口縁は真っ直ぐに立ち上がる。頸部の2個の小孔は焼成後に穿たれたものである。

Ⅲ 勝浦遺跡 (87-6)

この遺跡も伊須湾岸の遺跡で、地形も節子遺跡と同様である。

採集された遺物は、第27図に示すような内面布目圧痕土器の小片のみである。

Ⅳ 伊須遺跡 (87-7)

この遺跡も伊須湾岸の遺跡で、節子遺跡の対岸、伊須湾南岸のもっとも開口部に近いところにあり、地形も節子遺跡と同様である。

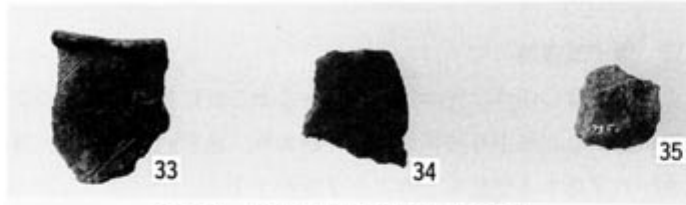
土師質土器の小片と琉球瓦を採集した。

Ⅴ 管鈍遺跡 (87-8)

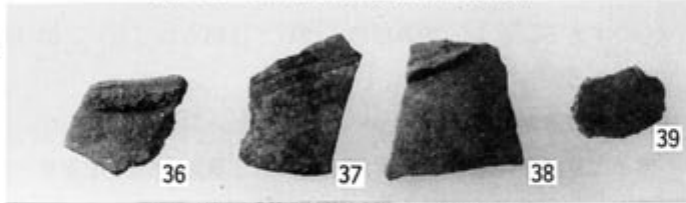
大島海峡の西側出口、奄

美大島本島の湾岸にある。
 この地形も節子遺跡と同様であり、砂丘の陸側緩斜面に遺跡は立地している。

採集した遺物は、第28・29図に掲げたもので、いずれも兼久式土器と思われる。33は口縁部が緩やかに外反する小形の甕形土器で、沈線が施文されている。34も同様である。35は内面に布目を圧痕している。



第29図 管鈍遺跡採集遺物 (写真)

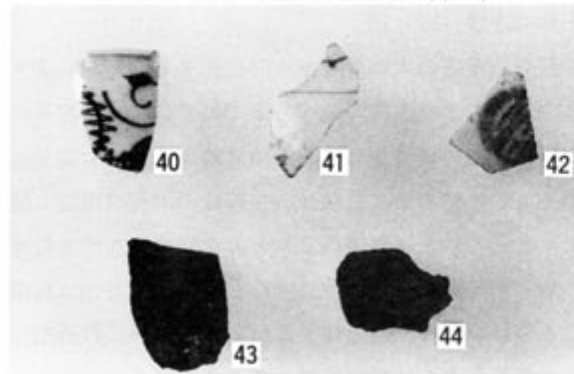


第30図 須子茂遺跡採集遺物 (写真)

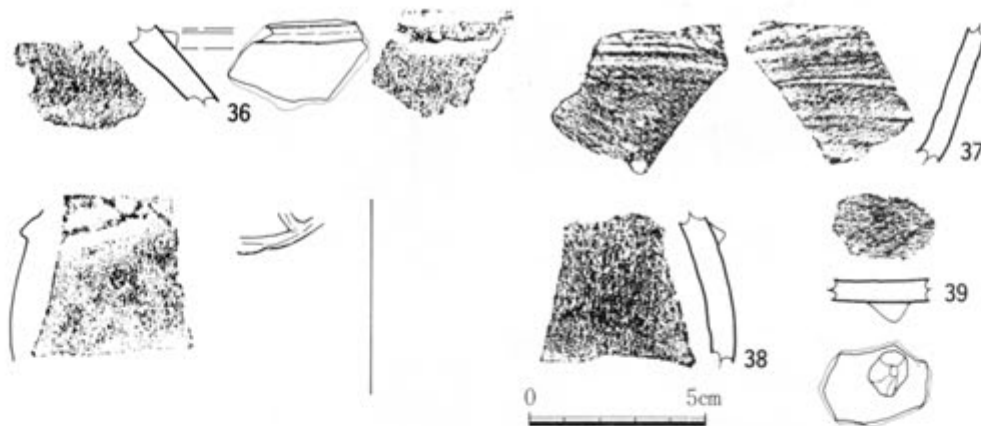
Ⅵ 西古見遺跡 (87-9)

管鈍遺跡から西にひと山越えた所にある遺跡で、立地条件・地形共に同じである。ここから北にひと山越えた所が屋鈍遺跡である。

兼久式と思われる土器の小片を採集した。



第31図 西阿室遺跡採集遺物 (写真)



第32図 須子茂遺跡採集遺物

Ⅶ 実久遺跡 (87-10)

管鈍遺跡と大島海峡を隔てた対岸ほぼ真南にあたる、加計呂麻島北端の湾の海岸砂丘にある遺跡である。立地条件・地形共に管鈍遺跡と同じである。類須恵器片と青磁片を採集した。

Ⅷ 須子茂遺跡 (87-11)

加計呂麻島西岸は外洋に面しているがここにも大小多数の湾が多く、湾奥には三方を峻険な山に囲まれた狭小な沖積地と砂丘があり、地形的には南部大島の他の地域と違わない。須子茂遺跡の立地する砂丘もこのような地形である。

第30・32図が採集された遺物である。36・38は突帯文を持ち、39はボタン状の貼り付けを持つものである。なお、39の器形については明らかでない。37は類須恵器で、器形・傾きともに不明である。

Ⅸ 西阿室遺跡 (87-12)

須子茂遺跡と同様加計呂麻島西岸にある遺跡で、立地条件・地形ともに須子茂遺跡とよく似ている。類須恵器片と染め付けの陶器片を採集したので、第31図に掲げた。

X 安脚場遺跡 (87-13)

加計呂麻島東端の大島海峡東出口に面する広く浅い湾入の海岸砂丘に位置する。ここの地形も今まで述べてきた遺跡の地形とよく似ているが、若干の違いがある。

それは、砂丘の後背地である沖積低地が現在でも完全に陸化して居らず、湿田に近い状態のままであることである。これは砂丘背後の潟湖の埋没・陸化が終わっていないためと思われる。

また、ここの砂丘は嘉徳のそれとおなじく現在でも発達中であり、大島東岸の特徴であろう。遺物の散布する場所は2地点に別れており、ひとつは集落と重なるような砂丘のほぼ中央部、いまひとつは砂丘が山地と接する個所に近い砂丘の西端部である。

前者で採集したのは類須恵器や兼久式と思われる土器片であり、そのうちのひとつを72に示



第33図 安脚場遺跡近景



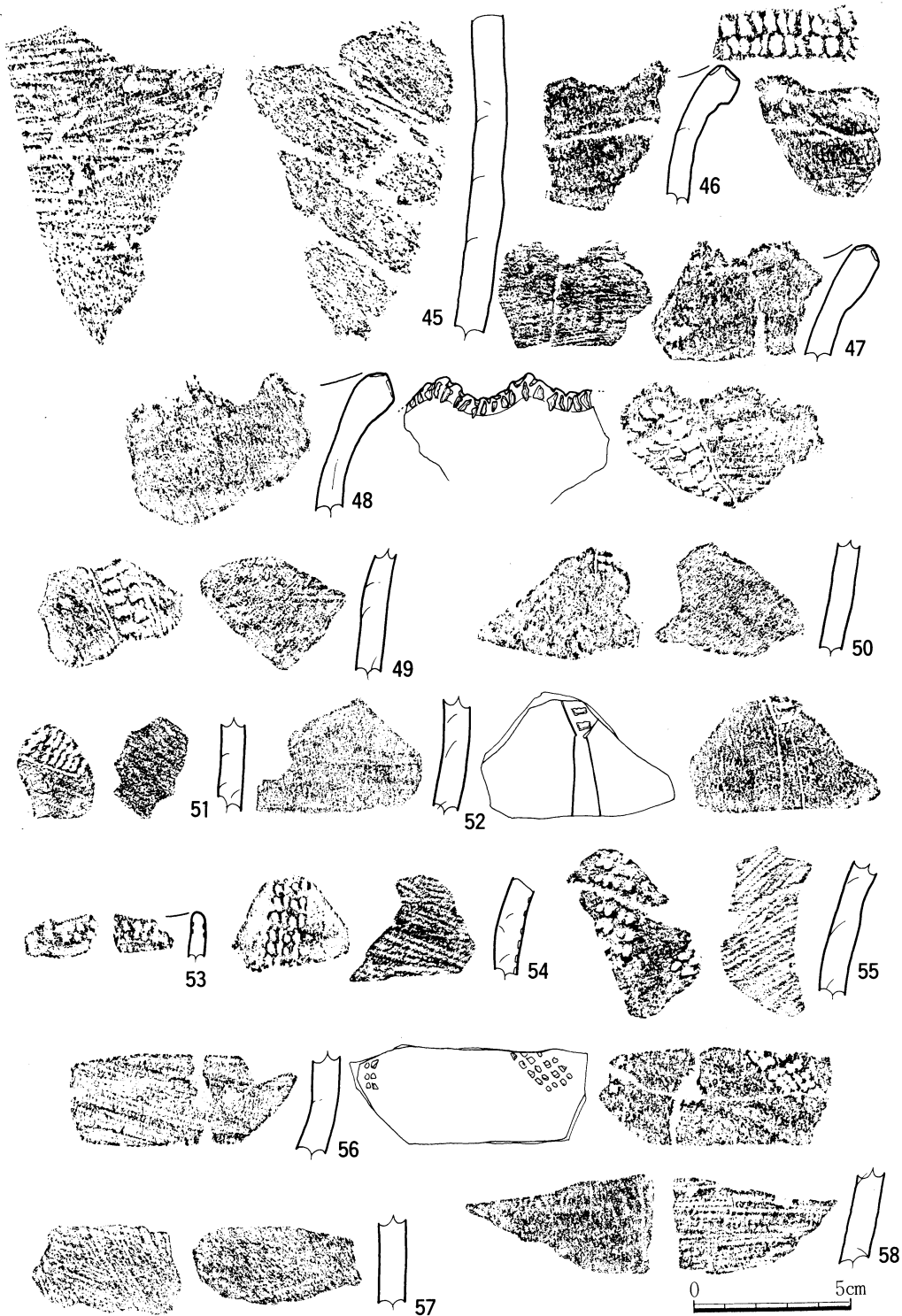
第35図 安脚場遺跡露頭状況



第34図 同 上



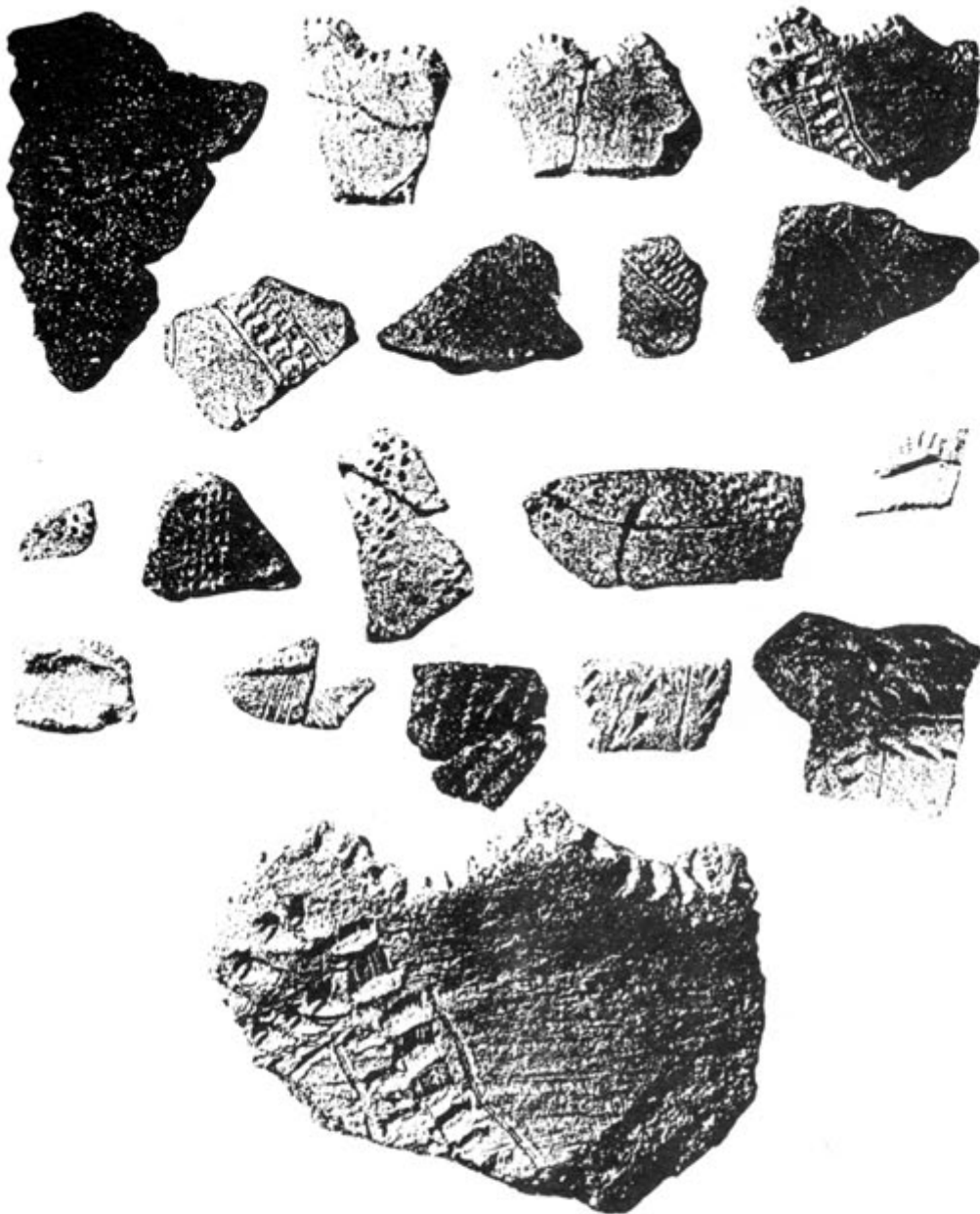
第36図 同 上



第37図 安脚場遺跡採集遺物(1)



第38図 安脚場遺跡採集遺物(2)



第39図 安脚場遺跡採集遺物 (写真)

す。また、この砂丘は他の遺跡と異なり、海岸側の斜面でも遺物が散見される。

後者では、海岸側の汀線近く、磯浜と接する砂丘の崖に縄文土器の包含層を発見したので、雑草やその他の雑物除去を行なって露頭を清掃し、崖面を若干削りながら層の観察・遺物の採集を行なった。45～71がその時の遺物である。

45は下位の層に入っていた遺物で、器面は貝殻腹縁による調整が見られ、内面では条痕調整

の後撫で消している。大形の形状の割には器壁は9mmと薄く、胎土は多量の砂粒を含み、なかでも長石が目立つ。

46～48はおそらく同一個体と判断できる口縁部片で、口縁部は外開きで波状を呈し、口唇部は尖り、内外に横位の連続した刺突が付けられている。内面は丁寧な撫で仕上げがなされ、外面ではヘラ状調整の後一部は撫で消している。施文は、平行沈線による区画文の間に口唇部刺突文と同じ施文具で連続刺突文が2状平行して施されている。

49～52はいずれも共通した文様構成を持ち、46～48の口縁部に接続する物と思われる。

53は小形の土器の口縁部片で、口唇部は丸く、内外に2状の連続刺突文を施している。

54～56も同一個体と思われるもので、叉状工具での2状の平行する連続刺突文が見られるが、



第40図 伝川内(住用村)出土遺物 一類須恵器小壺一

区画文は付けられていない。器面は丁寧に撫でられ、内面には条痕が残っている。

57～65は46～56までのいずれかに接続すると思われる胴部片である。

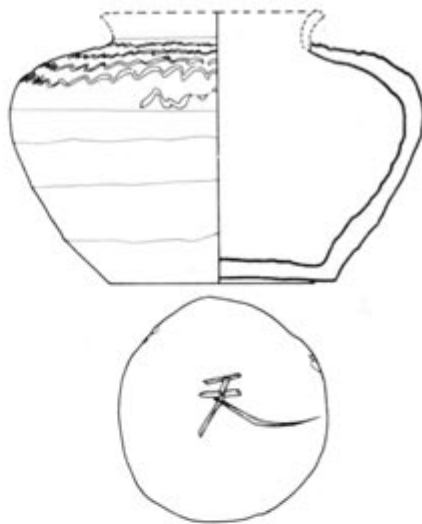
66・67は口唇部外面に沿うように蒲鉾状の粘土紐を貼り付けた口縁部片で、口唇部と粘土紐上に叉状工具による連続刺突文が施されている。

68は面縄前庭式と思われる土器である。

69は貝殻腹縁による斜位の刺突文を持つ土器である。

70・71は同一個体と思われるもので、内外面共に整形時の条痕が残され、上部では横位に、下部では縦位に単一の工具による深めの刺突が施されている。70は瘤状突起を持つ口縁部で口唇部は尖りぎみである。

72は口径11.2cmの類須恵器の小形壺である。



第41図 伝加計呂麻島出土遺物 一類須恵器小壺一

45の条痕文土器は南島では類例が少ないもので、条痕文系統とされる例は喜界島出土の赤連系土器と笠利町ケジ1遺跡例のみである。

46～56の土器については、区画文の有無の違いはあるが、連続刺突文の施文意識に共通性や連続性を見ることが出来る。これらの土器は、伊仙町本川遺跡で採集された尖底土器に類似点が求められる。本川遺跡の土器の特徴は、口縁部が大きく外反し、口唇部は平縁の平坦面をなす器形と、施文では、口唇部の平坦面の1条の縦位の連続刺突文と、胴部上位の棒状工具によるV字状の連続刺突文とである。ここにこの遺跡例との関連性を見出すことができる。また、沖縄県具志川島でも類似した土器が採集されている。

70・71は、沈線文の間が連続刺突で充填されることから、嘉徳式土器の範疇に含まれるものと思われる。69については類例が見出せない。

XI 皆津崎遺跡 (87-14)

この節の冒頭で述べたような事情で、この遺跡の現状は確認出来なかった。文献7によると、貝塚を伴う兼久式土器の時期の遺跡である。

XII その他の遺跡

第40図は、川内（住用村）で出土したと言われる類須恵器の小形の壺で、鹿児島県立図書館奄美分館の所蔵である。第42図は、加計呂麻島で出土したと伝えられる類須恵器の小壺で、笠利町立歴史民俗資料館の所蔵である。二者共に出土地を特定することは出来なかった。

第4表 瀬戸内町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺跡等	備考	旧番号
87-1	嘉徳	嘉徳	砂丘	縄	宇宿上・下層式、面縄東・西・前庭式、市来式、小池原式、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式他、石斧、と石、石錘、石皿他 鍾飾品他	「嘉徳遺跡」	87-1
2	西古見城跡	西古見字兼久	丘陵	城時代		別名 海城	
3	諸鈍城跡	諸鈍	山頂	城時代		別名 フワームテ	
4	嘉徳集落	嘉徳	砂丘	城時代	兼久式、類須恵器 布目圧痕	「サモト遺跡1・(2)」	
5	節子	節子	砂丘	城時代	青磁、類須恵器		
6	勝浦	勝浦	砂丘	城時代	布目圧痕		
7	伊須	伊須	砂丘	城時代	土師質土器、琉球瓦		
8	管鈍	管鈍	砂丘	城時代	兼久式土器		
9	西古見	西古見	砂丘	城時代	兼久式(?)		
10	実久	実久	砂丘	城時代	類須恵器、青磁		
11	須子茂	須子茂	砂丘	城時代	兼久式土器、類須恵器		
12	西阿室	西阿室	砂丘	城時代	類須恵器、染付		
13	安脚場	安脚場	砂丘	縄・城	嘉徳Ⅰ式、面縄前庭式 ?類須恵器		
14	皆津崎	皆津	砂丘	?	兼久式	「奄美における土器文化の編年について」鹿考古10号	

第5節 まとめ

ここでは今まで述べてきた遺跡の立地条件の簡単な類型化を試み、まとめとしたい。

南部大島の諸遺跡を通覧すると、前節の節子遺跡の項で詳述したような地形が多いことに気付く。箇条書きに要約すると、次のようなことである。

- 1 三方を峻険な山に囲まれている。
- 2 小河川とそれの形成する沖積低地（埋積谷）がある。
- 3 2の埋積谷の海への出口を塞ぐような形で砂丘が発達している。
- 4 2の埋積谷中に舌状に張り出す小砂丘が存在する場合もある。
- 5 外洋に面する入江、もしくは内湾に面していても外洋への出口に近い入江にある。（ただしこれには、湯湾釜・部連・勝浦遺跡の三つの例外がある）

以上を模式的に描き、遺跡の位置をプロットしたのが第42図である。これで見ると、湯湾釜遺跡・サモト遺跡・嘉徳遺跡・安脚場遺跡（縄文地点）の四者の立地とその他の遺跡の立地とに別れることが分かる。つまり海岸砂丘中央部に立地しないか、するかの違いである。さらに後者から5の条件の例外である、部連遺跡・勝浦遺跡を除くと三分類される。これを類型Ⅰ～類型Ⅲとし、次に要約する。

類型Ⅰ：埋積谷に舌状に張り出す小砂丘上、もしくは海岸砂丘と山麓との接するあたりに立地する遺跡〔前者（これを類型Ⅰaとする）にサモト遺跡・嘉徳遺跡、後者（これを類型Ⅰbとする）に湯湾釜遺跡・安脚場遺跡（縄文地点）〕

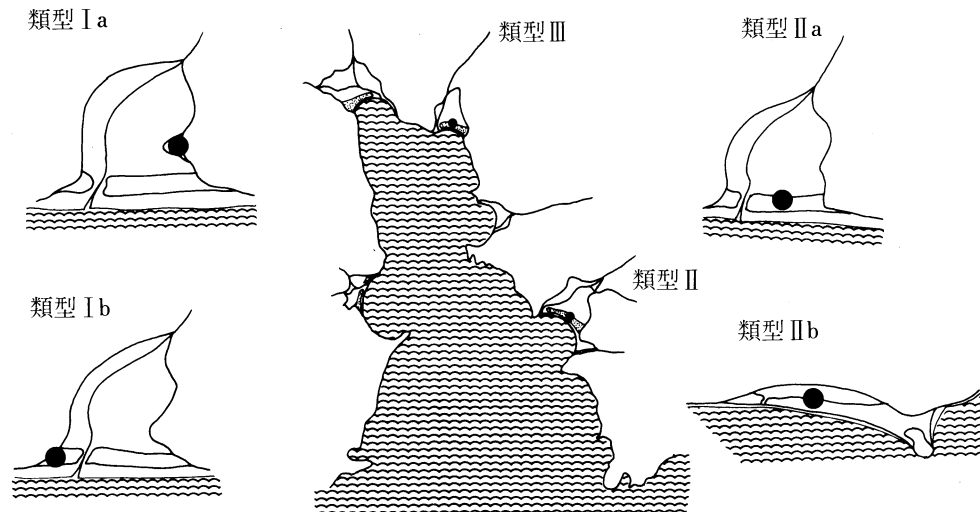
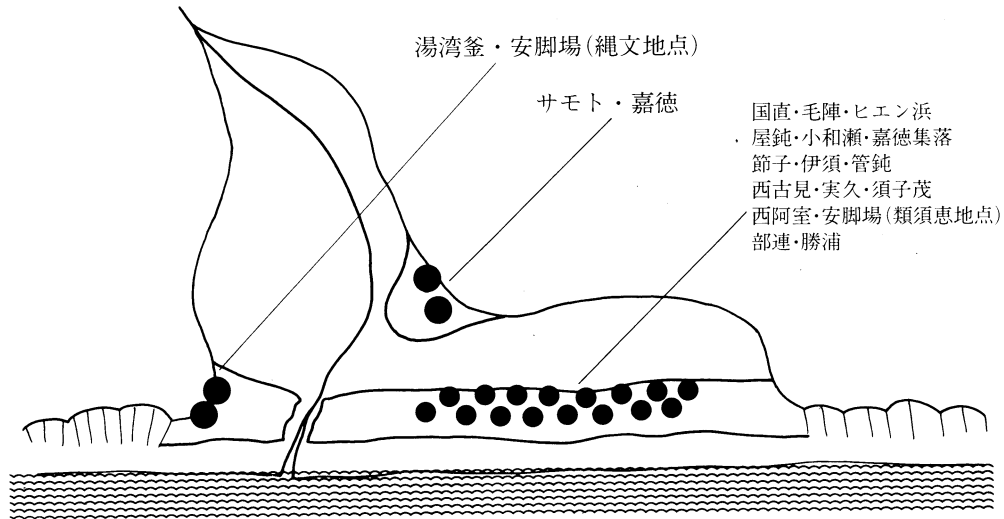
類型Ⅱ：海岸砂丘の沖積低地側緩斜面に立地する遺跡〔国直・毛陣・ヒエン浜・屋鈍・小和瀬・嘉徳集落・節子・伊須・管鈍・西古見・実久・須子茂・西阿室・安脚場（類須恵器地点）の各遺跡ただし砂丘は沿岸砂州と陸繋砂嘴の二種がある（今回の調査対象のみでは）ので後者の例であるヒエン浜遺跡を類型Ⅱbとし、他を類型Ⅱaとする。〕

類型Ⅲ：湾奥の入江の海岸砂丘に立地する遺跡〔部連遺跡・勝浦遺跡〕

なお各類型ごとの遺物をあげてみると、類型Ⅰでは赤連系・嘉徳式・宇宿上層式など、類型Ⅱでは類須恵器・兼久式・青磁など、類型Ⅲでは内面布目圧痕土器・青磁であり、各類型ごとの相違が見られる。特に類型Ⅰと類型Ⅱとでは兼久式・類須恵器の出現以前と以後の相違があり、極めて興味深い。

ただしこの相違が何によって持たされたのかは、今ここで速断出来るものではない。たんに、宇宿上層式の時期までに海岸砂丘が形成されていなかっただけであるかもしれない。

また、宇宿上層式の時期までの人々の生業活動による立地選択と、兼久式・類須恵器の時期の人々の生業活動による立地選択との違いでこのような相違が生まれたのかもしれない。この問題の解決には、南部大島だけでなく他の南西諸島の諸地域も含めた分析が不可欠であり、また各々の時期の生業活動のせめてアウトラインをつかまねばならないと思われる。これを今後の課題とし、この問題提起をもって結語としたい。



第42図 遺跡立地条件模式図

引用・参考文献

- 1 「昭和63年度 奄美群島の概況」鹿児島県大島支庁総務課 平成元年3月
- 2 「鹿児島県地質図」鹿児島県地学調査研究会、波多江ほか
- 3 「土地保全図(自然条件図)」国土庁土地局 昭和53年度
- 4 「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県教育委員会 1977.3
- 5 「サモト遺跡(1)」住用村文化財調査報告1 住用村教育委員会 1984.3
- 6 「サモト遺跡(2)」住用村文化財調査報告2 住用村教育委員会 1985.3
- 7 「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古第9号 河口貞徳 1974.6
- 8 「嘉徳遺跡 大島郡瀬戸内町嘉徳砂丘遺跡の調査」鹿児島考古第10号 河口貞徳 1974.10
- 9 「類須恵器出土地名表」琉球大学法文学部紀要 池田栄史 1987.3